私は休日に家でゴロゴロするのが好きだ。
肌触りの良いルームウェアを着て、人を駄目にするクッションの上で漫画を読んだり、SNSを見たり、動画を見たり。平日に頑張った自分へのご褒美タイムを満喫している。
今日はそれなりに暑い日で、私はキャミソールとショートパンツという楽な格好で過ごしていた。
ピンポーン、とインターホンが鳴った。
モニターを確認するといつもの配達のお兄さんが、さわやかな笑顔で立っている。
「〇〇急便です！」
「はいはーい」
返事をしてモニターを切る。
そういえば、この前の通販でセールをやってたからまとめ買いしたんだっけ。そうでなくても出不精で頻繁に通販を利用しているので、二、三日に一回は何かしらが届くのだ。
出る前に何か上着を羽織ろうかと思ったが、近くに見当たらなかった。まぁ、いいや。ちょっと荷物受け取るだけだし。玄関を開けると、お兄さんが爽やかな笑顔でダンボール箱を差し出してきた。
「こんにちは、〇〇急便です！ご注文の品、お届けに参りました！サインもお願いします」
「ありがとうございます」
お兄さんから受け取った箱は結構重かった。一度それを足元に置いてサインをしようと顔を上げたとき、お兄さんがこちらを食い入るように見つめていることに気付いた。

「？……あの、なにか？」
「あっ、いえ！今日暑いですよね」
「え？あぁ、そうですね。暑い中ありがとうございます」
確かに今日は暑い。お兄さんの顔がうっすら赤く、額にもうっすら汗を浮かべていた。それなのにこんな重いもの持たせてしまって申し訳ない。手早くサインをして、伝票を返す。
「ありがとうございました！」
サインを確認したお兄さんは爽やかな笑みで去って行った。本当に暑い中ご苦労様です、と去っていく背中に心の中で頭を下げた。

＊＊＊

その日は、珍しく友達と飲みに出かけていた。
なんでも同棲していた彼氏と別れたから愚痴を聞けとのこと。強引なところはあるけれど、面倒見のいい友人だ。久しぶりに出かけるのもいいだろうと思って、二つ返事でオーケーした。
「で、本当最悪だったの！あの男、浮気してたのよ！？しかも三股よ三股！」
「うわ～それは最悪だね」
「でしょ！？もう本当、信じられない！！」
彼女はすでに三杯目のビールを空にして四杯目を注文した。私も彼女のペースにつられるように、三杯目を空けていた。

お酒の力もあってか、彼女の愚痴は止まらない。相当な修羅場になったらしく、それはそれは悔しい思いをしたようだ。確かに浮気は最低だけれど、三股ってすごいな……。まだ夜は浅い時間だが、お酒の力もあってか、二人ともいい具合に酔っぱらっていた。

「大体、ヒョロヒョロだし、下手くそのくせによくもまあ、次から次へと浮気してくれたもんだわ！」

「……下手くそ？」

「そうよ！セックスが下手な男は最低よ！」

思わず友人を二度見してしまった。明け透けな言葉に個室を予約しておいて心底よかったと思う。

けれど彼女はそんな私の様子には気付かず、管を巻くようにしゃべり続ける。正直、こういう話は得意じゃない。私が曖昧に笑って頷いていると、彼女は胡乱な目で私を見ていった。

「あんたはどうなの？」

「え、私？」

「そう、彼氏できたの？」

そう聞かれて、思わず固まってしまった。彼氏は、いない。いたこともない。素直にいないと答えるのもなんだか恥ずかしくて、私は曖昧に笑って誤魔化した。友人はそんな私の様子には気付かず、また管を巻くようにしゃべり始めた。

「も～あんた見た目は悪くないんだから、そのだらけた生活やめて外出なさいよ！なんなら私がいい男紹介しようか？」

「え、いやいいよ……」

「なーに？もしかして性欲ないの？枯れてる？」

「枯れてないし！」

思わず食い気味で反論してしまった。友人はニヤニヤと面白がるように笑う。
「じゃあ、彼氏ほしくないの？」
「……今は別にいらないかな」
「えぇ～？じゃあ、一人で処理してるわけ？」
「なっ、」
あけすけに聞かれて思わず顔が熱くなる。そんな私を友人はニヤニヤと楽しそうに見ていた。
確かにもやもやする時は一人でするけれど、いまいち気持ちいいというのが分からなくて、かえってもやもやが溜まってしまうため少し苦手だった。
「え、なに？処理の仕方が分からないとか？」
「ち、違うし」
「じゃあ気持ちいいの？」
「……あんまり」
私の答えに友人は呆れたようにため息をついた。
「あんた、それ絶対損してるよ。性欲は人間の三大欲求なんだから、それを満たさないと健康に悪いし、美容に悪いし、仕事にも集中できないんだから」
「う……それはそうかもしれないけど……」
「でしょ？おもちゃとかは使ってるの？」

「お。おもちゃ……」
「そう、おもちゃ」
おもちゃ。その単語に思わず固まってしまった。それは使ったことがない。知識としては知っているけど、私には手を出すにはハードルが高いというか……。
「え、なに。まさか本当に使ってないの？」
「いや、その……」
「は～？あんた本当に枯れてるわね」
友人が呆れたように私を見る。私は何も言えずただ俯くしかなかった。友人はそんな私の様子に呆れたようにため息を吐くと、鞄の中からスマホを取り出した。
「まぁ、いいわ。一回おもちゃ使ってみなよ」
「え？」
「ね、こういうのはどう？」
そう言って彼女が見せてきたのは生々しいピンク色をした通販サイトだった。私は思わずのけぞった。
彼女は通販サイトのURLをスマホで表示し、私の目の前に置いた。彼女が見せてくれたページにはおもちゃと一口に言っても色々あるんだなということが分かるくらいたくさん商品が並んでいた。また、どぎつい物がいっぱいあるのかと思っていたら、意外にもパステルカラーのデザインがかわいいものも多く、正直驚きだ。
「ほら、これとかおすすめ」

「……吸引バイブ？」
彼女が見せてきたページには「クリ吸引バイブ」という商品が載っていた。説明欄に書いてある吸引力の説明文を読んでいると、友人はここぞとばかりに熱弁する。曰く、この商品は吸引力がすごくて、クリを吸われると頭が真っ白になるくらい気持ちがいいとのこと。またU字の反対にあるバイブは小さいながらも、Gスポットを刺激するような形状をしていて、クリとGスポットの両方を責めることができておすすめとのこと。私は友人のあまりの熱弁ぶりにちょっと引きつつも、おもちゃってこんなに種類があるんだなぁと思った。
「ね、試してみてよ」
「えぇ、でも……」
「物は試しよ！ね！」
そう言って友人はメッセージアプリで先ほどの商品と一緒にいくつかのURLを送ってきた。きっと彼女のことだ。私が買ったというまで永遠とその話題を出し続けるに違いない。私は諦めて、友人から送られてきたURLをタップし、おもちゃのページに飛んだ。

すっかり泥酔した友人をタクシーに乗せ、運転手に彼女の住所を告げる。
彼女は愚痴を吐ききったのか、「ありがと～」とふにゃふにゃと幸せそうな顔で手を振った。私はそれに笑って手を振り返した。
そして、自宅までの道のりを歩き始めたのだが、困ったことに私の頭の中は先ほどの通販サイトで紹介された商品のことでいっぱいだった。
友人にはああ言ったけど、本当は興味があった。だって、今まで一人で処理していたけれど、正直あまり気持ちよくなかったから。だからあんなふうに刺激されたらどんな感じなんだろうって興味があったのだ。

けれどおもちゃは色々あるから、どれを選べばいいか分からなかった。私はスマホをスクロールして商品を見ていくがどれもなんだか凄そうでとても選べない。

するとスマホ画面をチラチラ見ながら歩いていたためか、誰かにぶつかってしまった。

「きゃっ！」

「うわっと」

「す、すみません……」

「いえ、こちらこそ……あ！」

そう言って声を上げたのは、配達のお兄さんだった。

彼は私の顔を見ると嬉しそうに笑った。

「奇遇ですね！飲み会の帰りですか？」

そう言って快活に笑う彼は、いつもの配達のお兄さんとは違って少しラフな格好をしていた。薄手の半袖シャツに、紺色のズボンを履いている。

「あ、はい。友人と……」

「そうだったんですね。俺はちょっとここら辺で用事があって」

「そうだったんですね。お疲れ様です」

そう返事をすると、彼は照れたように笑って頬をかいた。その仕草がなんだか可愛く見えて、キュンと胸がときめく。配達のお兄さんはいつも爽やかだけど、今日はいつもよりもラフな格好だからか、なんだか幼く見えた。それにいつもより少し笑顔が砕けているというか……。なんだろう、こっちの方が素っぽくてすごくいいなと思った。

（ああ、あの子が彼氏とかそういうこと言うから……）

私は友人の言葉を思い出して、少し顔が熱くなった。

「あの、大丈夫ですか？顔赤いですけど……」

「だ、大丈夫です。ちょっと飲み過ぎちゃって……」

「あ！じゃあ家まで送りますよ！」

「いえ、悪いですし……」

「悪くないですよ。それに女性の一人歩きは危ないですし」

そう言って彼は爽やかに笑った。その笑顔にまた胸がキュンと高鳴る。

私は彼の押しに負けて、家までの道のりを二人で歩くことにした。話しているうち、お兄さんは私よりも二つ年下だということ、この近くの営業所に勤めているということ、一人暮らしをしていることなど色々話してくれた。

それと、私と趣味が似ていて話題もたくさんあって楽しかった。

「甘いもの好きなんですけど、そういうとこって女の子ばっかりじゃないですか。だからなかなか入る勇気ないんですよ」

「あはは。でも気にしないと思いますよ？この間カフェに行ったとき、男の人も結構いましたし」

「ほんとですか？なら今度入ってみようかな……。あ、すみません長々と話しちゃって……」

私のアパートを前にして彼は照れくさそうに笑った。ああ、この笑顔可愛いなと胸がキュンとする。
「いえ、楽しかったです。ありがとうございました」
「いえいえ。……戸締りには気を付けてくださいね」
彼はそう言って会釈すると、アパートに背を向けて去って行った。私は彼の背中が見えなくなるまで見送ると、部屋に戻った。
「ただいま～」
誰もいない部屋にそう声をかけて靴を脱ぐ。我が家は1Kで決して広いとは言えないが、一人暮らしには十分だ。私は鞄を置いて上着をハンガーにかけるとそのままベッドにダイブした。
「ああ～」
柔らかい枕に顔を埋めると、じわじわと幸福感が湧いてくる。
久しぶりにキュンとくることにあえた気がする。カッコよくてかわいくて。それに腕もしっかり筋肉がついてて、あの腕に抱きしめられたら……。
私は枕に顔を埋めながら足をバタバタさせて身悶えた。
アルコールに浸された頭と高くなった体温で妙な気分になってきた。私は布団に顔を埋めたまま、ストッキングを脱ぎ捨てる。
火照った体の熱をどうにかしたくて、私はそろりと自分の下着の中に手を伸ばした。そしてまだ潤っていない割れ目に指を這わせる。濡れたらちゃんと気持ちよさを感じられるから、と自分の気持ちいい場所を探す。けれどなかなか気持ちよくなれずに、なんだかもどかしくてもやもやしてきた。
私は下着から手を出すと、スマホを手に取り友人とのトーク画面を開く。

そして私はそのまま通販のページに飛んだのだった。

＊＊＊

その日の私はそわそわとして落ち着かなかった。

なんて言ったって今日例のアレが届くのだ。私は部屋の掃除をしたり、念入りにシャワーを浴びたり、身なりを整えたりしてその到着を待っていた。

ピンポーン、とインターホンが鳴る。私は急いでモニターを見ると、そこにはいつもと違って、にこやかな笑顔を浮かべた年配の配達員さんが立っていた。いつものお兄さんではなかったことを少し残念に思いつつ、今回ばかりはお兄さんでなかったことに安堵した。

「こんにちは！〇〇急便です。ご注文いただいた商品お届けに参りました！」

「はーい」

私は小さめのダンボールをドキドキしながら受け取った。配達員さんは愛想よく笑うと、「ありがとうございました！」と言って立ち去った。

私は大急ぎで部屋に戻ると、ドキドキしながら段ボールを開封していく。しかし、出てきたのは私が予想していたものではなかった。

「あ、そういえばこれも今日届くんだった……」